



## 研究と実践をつなぐ

清水 篤

### 1. はじめに

「これからの時代に役立つ言語力の育成」をテーマに、研究と実践をつなぐを信条として仕事をさせていただく機会となった。

平成19年3月、神戸市教員を退職し、神戸親和女子大学の教員として、多様な経験と多くの人との出会いがあった。皆ご縁である。今、このご縁と、学生はもちろん、これまで導き、支えてくださった多くの教職員の方々に心より感謝している。

### 2. 本物の国語教師との出会い

#### 1) 岡田崇先生との出会い

「附属小へ行って勉強してみないか。」とお声をかけていただいたのが、岡田崇先生である。

昭和52年4月の人事異動で、神戸大学教育学部附属住吉小学校の教官となった。そこには、国語主任の小山時雄（後に、兵庫県教育委員会義務教育課指導主事・日高町教育長）を筆頭にして、高光義博、阿川士郎、菅井良作、長見芳典、高原俊吉、村木修（後に、川西市教育長）の神戸・阪神間の国語実践人がおられた。附属小二年目を迎えたとき、岡田先生から神戸の国語研究集団「東風の会」にお誘いいただく。

この会では、神戸から植原理、松本忍、西村幹生、前田賢一、遠藤明、松本信子、岩本しず子、阪神間から、石井俊明、山本隆三、上坂勝美、明石から岡本壽、三谷正信、上山松子、片井宣夫と、県下の国語の錚々たる実践人とお出会いさせていただくことになる。今、この「東風の会」の例会に、清水ゼミの3・4回生が学生会員として参加させていただいている。

この岡田先生にお引き合わせいただいたのが、当時、光村図書出版の重役で大阪支社を中心に活躍されていた石川正久氏である。石川氏は、私と同郷の三重県伊勢市のご出身で、高等学校の大先輩であった。何というご縁であろうか。この石川氏に言語の渡辺実氏、文法の宮地裕氏、文章論の樺島忠夫氏、そして、甲斐睦郎氏、中西一弘氏などの研究者、さらに、児童文学者のあまんきみこ氏、工藤直子氏、今西祐行氏、上笙一郎氏、詩人の谷川俊太郎氏との出会いの場をいただくことになる。

#### 2) 今井鑑三先生との出会い

「縁」は、つながって、広がっていくものである。

附属住吉小学校に赴任して三年目の昭和54年、当時、奈良女子大学附属小学校副校長の今井鑑三先生との出会いである。「奈良の学習法」で名をとどろかせていた奈良女子大附属小には、

今井鑑三先生を筆頭に、千代宏や若手の相田満理子がおられた。今井先生のお誘いで、主宰されている国語教師「竹の会」に参加させていただくことになる。

この「竹の会」は、子供のための「よい授業」の実践研究を追究するところにあった。「竹の会」が、別名「垢落としの会」と言い合って会員同士が切磋琢磨してきている所以がここにある。常に参加者は、「子供が生きているか」という大きな問いを持っていた。

今井先生の例会でのご指導は、プロの教師として実に厳しかった。授業については、「これで子供が育ちますか。」と、絶対に妥協を許さないという姿勢を貫かれていた。

京都教育大附属桃山小の川端建治、奈良帝塚山小の瀧川佳市、後藤鎮房、その当時、滋賀大学附属小におられて、滋賀県で国語教師「さざなみの会」を主宰されている吉永幸司先生との出会いもこの会であった。

今井先生との出会いの中で、関西の国語人の実践を広く知らせようと発行された研究誌、『国語の教師』編集のお手伝いをさせていただいた。毎号の編集会議は、まさに国語教育の今日的課題の吟味の時間であった。『国語の教師』の編集会議は、たいてい朝から夕方五時か六時までかかっていた。その後、必ず毎回決まって、帰路に近くの居酒屋へ立ち寄った。その場の話題は、いつも授業論と教材論、教師論はもちろんであったが、編集委員みんなが一番楽しみにしていたのは、今井先生の若い頃のお話であった。今井先生が、鈴木三重吉の『赤い鳥』に児童文学を投稿されていたこと、その鈴木三重吉や坪田譲二との交流のお話など、話題の尽きることはなかった。

今井先生の晩年は、「教師を育てる」「教師の力量を高める」ということに命を燃やしておられた。どこまでも授業を追究され、授業の質をどう高めていくかを考えておられた。そこから生まれたのが、『国語科よい授業の追究』『国語科よい授業の要件』『国語科よい授業の実証』の三部作である。まさに授業追究の道筋を示した実践から生まれた研究成果であった。と同時に、私にとって、「奈良の学習法」の神髄に触れる貴重な機会となった。

### 3) 藤井昭三先生との出会い

昭和62年、神戸大学教育学部附属住吉小学校から神戸市教員に戻った年、兵小国研・兵国連「書記」としての仕事をお願いいただいたのが藤井昭三先生であった。以後、平成19年に退職するまで、書記、監事、副部会長、部会長として兵小国研・兵国連の運営に携わることとなった。

この会には、兵庫県が生んだ国語人・芦田恵之助先生、東井義雄先生、及川平治先生、西口三三先生、戸田唯巳先生の授業実践を通して、目の前の子供を育てるという理念や心情が、今もなお兵庫県の国語人に脈々と受け継がれて今日に至っている。

「兵庫県国語教育連盟」が、低迷していた戦後の国語教育復興の願いと使命のもと発足したのは、昭和25年11月のことであった。発足の中心的な役割を担われたのは、当時、県立教育研究所小中学校国語科担当所員の中西甚太郎先生であった。民間教育団体で、その活動を通じて、

「国語教育の活性化を図りたい」という大構想であった。発足当初の役員には、大富一五郎（加古川）、大高義一（神戸）、田中武夫（阪神）、藤本久治（東播磨）、高橋虎夫（中播磨）、田淵初美（西はりま）、有本二郎（但馬）、田畑広治（丹有）、堀田悦郎（淡路）の諸先生が名を連ねられ、中西甚太郎先生が、監事の任にあられた。「東風の会」の大先輩である。兵庫県小学校教育研究会国語部会のできたのは、それからずっと後のことである。

### 3. アクティブ・ラーニングと「学びの質」の間直し

#### 1) 「学び」を過程でとらえる

中教審教育課程企画特別部会の「論点整理」の中で、これからの学習指導改善の方向として重視されているアクティブ・ラーニングについて、次の3つの視点が示された。表現活動や思考活動の「結果」だけでなく、そこに至る「過程」をも意識していく学びの視点が、明確に示されたと言える。

- (1) 見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているか。
- (2) 自らの考えを広め深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- (3) 学習課程の中で、問題発見・解決を念頭においた深い学びの過程が実現できているか。

一人一人の子供達が、いかに頭を働かせているかという「学びの質」が問われている。「主体的・対話的で深い学び」をいかに実現するかという視点からの「学びの質」の問い直しである。

#### 2) 「学び」の過程を創り出していく場づくり

子供達に、「自力で学びを具体化する場」や「それぞれの学びを確かめ合える場」が位置づけられている学習では、一人一人において「学びの過程」が成立し、それらが互いにかかわり合い、より深い「学び合い」へと変容していく。学習の中で、子供達一人一人が、ものの見方・考え方・感じ方を広げ、深め・高めていく。アクティブ・ラーニングは、自らの考えを確かにしていく場とプロセスである。アクティブ・ラーニングは、「反応」から「思考」「思索」へ、このような場づくりの工夫が、教師の重要な仕事となる。

##### ①教材の学習価値と出会う場（ひとり学び）

子供達一人一人が、いま持っている自らの力で教材と対峙する。「分かった」「なるほど」「そうだったのか」「おもしろい」「不思議」「どうして」「なぜ」「分からない」「もっと調べてみたい」など、自問自答しながら取り組ませる。

##### ②共通課題を把握する場（ひとり学び、全体での学び）

それぞれの学年の発達段階や学級の実態にあった課題意識を共有し、高める場づくりを工夫する。(1)「教材の学習価値と出会う場」での取り組みが基になる。「分かった」「なるほど」「そ

うだったのか」「おもしろい」「不思議」「どうして」「なぜ」「分からない」「もっと調べてみたい」を学級共有の課題にする場である。この取り組みを積み重ねることによって、子供達の問題意識、学習課題の質は、高まっていく。

ア 低学年…教師が子供の興味・関心をもとに課題を設定する。

イ 中学年…子供と教師とで課題をつくる。

ウ 高学年…子供達自身で課題づくりに取り組ませる。

### ③共通課題に対する、自分の「考えづくり」に取り組む場（ひとり学び）

子供達に、自力で、自分なりの「考えづくり」に取り組ませる。ここでは、次の4点が重要である。（1）で取り組んだワークシートやノートに書き直したり、書き加えたりしていく。

ア 解決すべき共通課題を意識する過程

イ 解決のための手掛かりを探す過程

ウ 見つけた手掛かりをもとに、気づきを書き込んだり、書き出したりする過程

エ 気づきをつなぎ、課題に対する考えをまとめる過程

### 3) お互いの「考えづくり」を交流する場（グループ、班、全体の学び・集団思考）

子供同士のコミュニケーションによる「考えづくり」の交流である。ここでは、発達段階に合わせた交流の仕方、子供同士による話し合い・聞き合いを組織する。考えの交流だけに終わらず、その「考えの根拠と論拠（理由）の交流（「どこから、どう思ったり考えたり気づいたりして、どうわかったのか）」になるように配慮したい。教師は、子供達の発言をじっくり聞きながら、それぞれの考えや考えの根拠の曖昧さ、ずれ、偏り、対立等が見えてくる構造的な板書を心がける。話し合う子供同士の関係が広がっていくように、コーディネーターに徹する。

① 低学年…聞いて響き合う「共感的コミュニケーション」を充実する場

② 中学年…聞いて比べ合う「比較コミュニケーション」への意識付けをする場

③ 高学年…聞いて深め合う「評価コミュニケーション」に挑戦する場

### 4) 新たな「課題」を共有する場（グループ、班、全体の学び）

学びの進展とともに、はじめの課題が解決される過程で、また新たな課題が浮かび上がってくることもある。一つの課題の解決とともに、新たな課題を共有していく。新たな具体的な課題に対する子供同士のコミュニケーションによって、お互いの考えをより豊かな深いものにしていく。新たに生まれた共有課題についての考えの交流により、「ひとり学び」で持っていた考えが、より明確で確かなものになっていく。

#### 4. 自らの考えを確かにしていくアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングによる「学び」の本質として、重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善の視点として、「ノートづくり」（「主体的な学び」）、「集団思考」（「対話的な学び」）、「学習レポート」（「深い学び」）を学習計画に位置付ける。

##### 1) 国語科の学習は、「書くこと」に始まり「書くこと」で終わる（「主体的な学び」）

国語科の学習だけでなく、子供のすべての学びの基本は、「書くこと」である。「書くこと」は、自分のものの見方・考え方、感じ方を確かにし、明確にしていく。一時間（単元）の学習を通して、子供は、学習内容に対してさまざまなことを思ったり、考えたり、感じたりしている。学習が進むにつれて、その時その時、ものの見方や考え方、感じ方は、それぞれ質的に高まっていく。「書くこと」によって、ものの見方や考え方、感じ方は、単なる思い付きではなく、論拠のある確かなものへと高まり、深まり、広がっていくことになる。学習の中では、子供達一人一人に文を綴り、文章を書くこと、文章を書きまとめさせることに重点をおきたい。書くことは、自分の考えを練り、整理し、まとめることである（思考力）。書くことは、自分の考えの筋道を見つめる、確かめることである（論理力）。「書くこと」の意義と効用である。子供達の学習は「書くこと」に始まり「書くこと」で終わる。

##### 2) 集団思考の場づくり（「対話的な学び」）

###### ①学級集団は、集団思考の場でもある

学級の成員みんなで一つの学習課題を追究していく。多くの場合、学級での集団思考は、話し合い活動によって進められていく。学級での話し合いの良し悪しは、学習の深度を左右する。

###### ②集団思考の基本にかかわることを教える

よい学習集団づくりの場面は、授業の中にある。授業中に「はい」と返事をしたり、相手の立場を思いやったり、お互いに譲り合ったり、励まし合ったり、また、助け合ったり、協力し合ったりする。さらに、自尊感情を育てたり、自分自身に自信を持たせたりすることもよい学習集団づくりの一環なのである。間違えたり、失敗したりしても笑わない。分からない友達や困っている友達に手を差し伸べたり、教えたりする。班やグループ活動で協力する。手助けを必要としている子に手を貸してやる。成熟した学級の授業中に当たり前のように見られる光景である。そこでは、子供同士、また、子供と教師の心が通じ合っている。信頼関係が築かれているのである。

###### ③集団思考としての「話し合い」

「話すこと・聞くこと」の学習の価値は、自分の考えを確かにしていくことにある。自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりすることによって、お互いの考えを確かめ合うのである。自分の考えと友達の考えを聞き取り、聞き比べ、聞き分けていく。そして、最後に自分の

考えを明確にする。確かな自分の考えを明確にしていくところに「話すこと・聞くこと」の学習の価値と効用がある。集団思考は、アクティブ・ラーニングの重要な場であり、プロセスである。

#### ④ 追究を始める「おたずね」

子供に自分の発言の後に、「どうですか。」と、おたずねの言葉を付け加えることを教えておく。この「どうですか。」という言葉一つで、学習内容の追究が始まる。子供達が、お互いに考えを練り合う場である。教師の説明を聞いたり、友達の発言を聞いたりした後は、必ず「おたずね」があることを意識させるとともに、「聞いて確かめる」「分からないことは聞く」「聞き逃したことは聞き返す」という姿勢を育てるのである。「聞く」ことへの構えをつくる場である。

#### ⑤ 考えを練り合う集団思考を促す相互指名

「おたずね」の仕方に慣れてきたところで、さらに「〇〇さん、どうですか。」と友達を指名するように教える。より積極的な意見交流である。この発言は、子供達による相互指名になる。相互指名は、子供達が、自ら司会をして、子供達の力で学習を広げたり、深めたりする子供達主体の学習を創り出していくことにつながっていく（主体的・対話的で深い学び）。国語科の学習だけでなく、日々すべての教育活動の中で取り組んでいくことによって、次第に相互指名による学習の仕方が習得されていく。ここに、「主体的・対話的で深い学び」が生まれてくる。

### 3) 質問力を育てる（「対話的な学び」）

質問のできる子を育てる。質問は、対話的な学びの中で、自己確立への道筋である。友達の考えや意見を聞く。聞きとる→聞き比べる→聞き分ける→自分の考えを確かにするといった過程の中で、「分からないこと」「知りたいこと」、また、「はっきりさせたいこと」「どちらか迷っていること」を質問する。質問することによって、自分の考えや意見を明確に、より確かにしていくのである。

一つの質問が、学習内容を深め、広げたことを学級の全員みんなで確認する作業である。質問が、学習活動を活性化するだけでなく、集団思考を促し、望ましい学習集団を形成していく。このことは、国語科の学習に限らず、すべての教育活動において大事にしたい。そうした地道な教師のはたらきかけで、質問の質的向上が自覚され質問の仕方は育てられる。

### 4) 「書くこと」で学習を振り返り、学びを再構成する（「深い学び」）

#### ① 本時（単元）の学習の終わりに、「書くこと」で学習を振り返り、学びを再構成する

子供達のそれまでの考えづくりの「過程」を目に見える形で自己評価することである。ここでは、子供達一人一人の学習内容に対する学びだけでなく、子供達同士の「学び合い」も評価される。また、自らの学習への向き合い方や、意欲、興味・関心、さらに、聞き合い、話し合

いの力も試されている。教師にとっては、自分の学級の子供達に「学びの過程」が機能しているかどうかを振り返る機会となる。「学びの過程」の充実度が、子供達一人一人の学びをより質の高い、確かなものにしていくことになる。

## ②単元の終わりに「学習レポート」に取り組ませる（「深い学び」）

一時間一時間書きためてきたノートを手掛かりにして、単元の終わりに学習作文に取り組ませる。学習の中に題材を求める。いわゆる「学習レポート」である。「書くこと」の題材を学習の中に求めることによって、教科の学習そのものを高めたり、広げたり、深めたりすることになる。子供達が、学習レポートに取り組むことによって、一人一人の学びがさらに深い学びとなる。子供達にとって、自らの学びを確かにしていく場であり、プロセスである。

子供達は、もう一度教材全体を見つめ直し、とらえ直し、自分が論じてみたいいくつかの項目立てをする。文章構成を通して、思考作業がはたらく。この活動によって、子供のものを見、とらえる視点、視野、焦点づけ、深まりなどが決まってくる。子供は、自分が論じてみようと思う事柄をありったけの力を振り絞って意味づけていく。価値づけていく。一時間、または単元の終わりの「書くこと」の活動は、結果ではなく、自らの考えを煮詰めていく過程の記録ともいえる。本時（単元）の学習の中で、「書くこと」で学習を振り返り、学びを再構成することは、「何ができるようになったか」「何を学んだか」「どのように学んだか」を明確にし、自己評価することでもある。ここにアクティブ・ラーニングの本来の姿がある。これは、小学校の学習指導だけでなく、大学での授業にも通じるのではないかと考えている。

## 5. おわりに

本学にお世話になってから、神戸市教育委員会の「力のつく授業づくり」研究推進や手引き『教室で鍛えることば力』検討委員として、また、洲本市小学校国語部会、朝来市小学校国語部会、亀岡市小学校国語部会、揖龍小学校国語部会、三木市立三木東小学校、豊岡市立清滝小学校、神戸市立鶴甲小学校、佐用市立三河小学校など、多くの学校、先生方と、授業実践を中心にした国語科学習指導の継続研究に携わる機会をいただいた。ここでの学びは、教科の学習指導だけでなく、教育課程やこれからの学校の在り方など、今日的な課題もあった。その多くは、本学で担当させていただいた「国語」や「教職論」の講義に、また、教採セミナーにと、現場の貴重な生きた研究をつなぐことができた。今も現場に出た学生が、「東風の会」の先生方やそれぞれの地で、研究を通して知り合った現場の先生方に支えられているのも心強い。

この10年を振り返ってみると、多くのものを与えていただいたのは私自身であり、与えてくださった、学生、教職員の皆さんにほんとうに心から“感謝”の一言である。

## （略歴）

昭和45年 皇學館大学文学部史学科 卒業

昭和45年 神戸市立鶴越小学校 教諭 以後4校で勤務  
昭和52年 神戸大学教育学部附属住吉小学校 文部教官教育職（文部教官教諭）  
平成5年 神戸市立多井畑小学校 教頭  
平成7年 神戸市立二葉小学校 教頭  
平成9年 神戸市立南五葉小学校 教頭  
平成12年 神戸市立長楽小学校 校長  
平成14年 神戸市教育委員会指導部指導課指導主事・神出自然教育園長  
平成17年 神戸市立板宿小学校 校長  
平成19年 神戸親和女子大学 非常勤講師を経て、教授 現在に至る  
平成20年 神戸海星女子学院大学 非常勤講師 現在に至る

#### （学会等の活動）

日本国語教育学会

国語研究集団「東風の会」

#### （その他）現在も任期中のもの

神戸市教育委員会指導部指導課「力のつく学校づくり」 研究委員

神戸市教育委員会指導部指導課「教室で鍛えることば力」 検討委員

神戸市教育委員会総合教育センター 2年次フォローアップ

神戸市立鶴甲小学校 学校評議員

#### （研究業績）※ 以下、主なもののみを記す

##### 1. 著書

- ①『言語指導の方法』（単著）光村図書出版 1980年
- ②『ことばの楽しい学習』（単著）甲南出版社 1980年
- ③『子どもに生きる国語の力』（単著）甲南出版社 1981年
- ④『気づく・わかる・できる授業創造』（単著）明治図書 1982年
- ⑤『国語科よい授業の追究』（共著）明治図書 1985年
- ⑥『国語科よい授業の要件』（共著）明治図書 1986年
- ⑦『国語科よい授業の実証』（共著）明治図書 1987年
- ⑧『かさこ地ぞうの教材研究と全授業記録』実践国語研究別冊81（単著）明治図書 1988年
- ⑨『豊かな感性を育てる文学教材の指導』（単著）明治図書 1989年
- ⑩『個を生かそうとする国語科授業』（単著）明治図書 1990年
- ⑪『たのしく学習をはじめのためにーわたしの国語教室』国語連盟シリーズ14（単著）甲南



出版社 1990年

- ⑫『兵庫の人物ものがたり』（単著） 甲南出版社 1991年
- ⑬『学び合う力 伝え合う心』（単著） 2005年 甲南出版社
- ⑭『「読むこと」を中心とした授業展開を探る』（単著） 甲南出版社 2007年

## 2. 論文

- ①「文章表現を声や動作につなぐことによって人がらや場面の様子を読み深める—2年『かさこ地ぞう』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践31 1977年
- ②「文章につぶやきかけながら登場人物の心情を読み深める—2年『かさこ地ぞう』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践32 1978年
- ③「想像したことを吹き出しで表現することによって、お話のおもしろさに気付いていく—1年『くじらぐも』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践 33 1979年
- ④「比喩表現の成り立ちを考えることによって、言葉の意味のおもしろさを感じ取っていく—4年『ねこをとえに使うなら』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践34 1980年
- ⑤「どの子ども学ぶ実感のもてる授業—6年『物語をつくって楽しもう』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践35 1981年
- ⑥「学習内容に豊かな感情を抱く指導を工夫して—6年『感じたことをあらわそう』を例にして」（単著） 神戸大学教育学部附属住吉小学校研究紀要教育実践36 1982年
- ⑦「子供が学びとる道すじを創り出していく」（単著） 奈良女子大学文学部附属小学校研究会 研究紀要「学習研究」 283号
- ⑧「自らの考えをねりあげていく国語のレポート」（単著） 「国語の教師」第7号 鷺書房 1983年
- ⑨「学習の中に題材を求める」（単著） 「国語の教師」第15号 鷺書房 1986年
- ⑩「文章構成の理解を深める指導—ワークシートを取り入れた文・文章構成の指導」（単著） 「国語教育」24 明治図書 1987年
- ⑪「こども・ことば・生きる—三木徹君のことなど」（単著） 「国語の教師」第8号 鷺書房 1991年
- ⑫「学習のまとめのノートをつくる中で」（単著） 「国語の教師」第140号 明治図書 1994年
- ⑬「アクティブ・ラーニング型の導入による「国語」の授業改善」（共著） 平成28年3月 『児童教育学研究』第35号 神戸親和女子大学

### 3. その他

- ①「国語 6 年教科書びったりテスト 完全準拠光村図書版国語 創造・希望」(単著) 新興出版社 1989年
- ②「国語 6 年教科書びったりテスト 完全準拠教育出版版国語 上・下」(単著) 新興出版社 1989年
- ③「教室で鍛えることば力」(監修) 神戸市教育委員会指導部指導課 2016年